

ている。忘れていた半世紀前の惨状を、この原稿執筆に当たりいろいろ思い出され、眠れない夜が続いたと
のことである。

(福島県引揚者団体連合会)

会長代行 佐藤 清)

父を求めて北満横断の旅

埼玉県 佐藤 彰 恭

〔旅の目的〕 平成五年八月二十三日、成田山新勝寺に旅の安全を祈願し、空港に近いホテルに一泊して旅行の最終打合せを行った。

この旅行は姉と私が、叔父(母の実弟)と義兄(姉の配偶者)の強い協力を得て、「父親探し」と「昭和十三年渡満の地から終戦後の苦難の引揚げまでの地を踏破する」、「最悪の場合は遺骨収集と慰霊」、この三本を主目的として立案したもので、母も当然同行する予定であったが、四、五人の私的旅行となると、訪れ

る土地や順序も希望どおりにはゆかず、二案、三案と変更し、七割方満足できる計画になり、実施する運びとなった。成田を出発地として大連・哈爾濱・佳木斯・齊々哈爾・海拉爾・北京のルートで十二泊十三日間のスケジュールは八十三歳の高齢な母には、非常に無理な異国の強行旅行なので、同行を断念することになった。せめて十年くらい前に実行できたならば、と思うと母の無念さが思いやられる。これも私が仕事に追われて過ぎてきて、定年になってどうにか実行に移されたもので、なかなか親孝行はできないものです。

〔大連の地〕 二十四日午前十時五十五分、大連行は定刻通り新東京国際空港を離陸した。快晴の中を約四時間で大連周水子国際空港着陸、出迎えてくれた旅行者の全ルートガイドの劉紅さんと大連地区ガイド二人に案内されて、ソ連製バンに乗車、大連市内へ。「北方の真珠」と呼ばれた美しい町を想像していたが、騒然とした砂煙が舞い上がる建築ラッシュの街を見て、東京オリンピック前の日本の姿を思い出した。古い建物を取り壊し、高層建築物に変貌の最中で大型ダンブ

・トラックが凸凹道路を蛇行しながら走り、その間を自転車の列が器用に縫って行く。フラマホテルに旅装を解いて、まずロビーで中国語と中国の生活の匂いに慣れ、徐々に街の中へ出て見ようとホテル付近の市場の中へ足を踏み入れて見た。商人は目が利く。日本人とすぐ見抜いて流暢な日本語で周りに集まって来る。気持ちが悪くなって市場を出たが、この環境に慣れないければ「父を探す」ことができない。しかも日本語の通じない土地に踏み込むのだ。

翌日大型クレーンの林立する、東洋第二の港、大連埠頭の前に立った。上海港に次ぐ規模の不凍港のためロシア、日本など列強の争奪の哀史を持った街、異国情緒を漂わせる玄関口である。埠頭前の人の流れを見ていると、昭和十三年の我が家の渡満当時を思い出した。

昭和十二年日華事変勃発、翌年国家総動員法が成立し、軍国主義を背景にした暗黒の時代、国内は不況で仕事はない。当時、満州国三江省佳木斯市内で外科医を開業していた母の妹夫婦の招きで、景気が良い満州

で「十年間で一財産」を夢見て、七歳の姉を頭に私と弟・妹の四人を連れて東京駅を出発。神戸港から大連港まで四日ばかりだった。大連埠頭前で馬車マヤチに乗り大連駅に向かう。このときの「馬車」の呼び声が父の使った中国語の第一声であったように記憶している。牡丹江マダニョウ經由佳木斯行の特等席に乗車し、大連駅を後にした。これが、十年計画の出発進行である。このとき、子供心に楽しさいっぱいであり、だれも「行きは良い良い」で帰りの怖さを予知することはできなかった。ハ爾濱行き搭乗時間まで、市内観光で老虎灘公園と星海公園の海水浴場で遊び、貝殻細工の工場を見学して歩く。中国人の指先の器用さが細工工芸品を發展させている。

見て歩き、食べて歩きの半日で周囲に少しずつ慣れてきた。

十四時ころハ爾濱空港行きが離陸した。定員五十八人程度の四発式中型旅客用プロペラ機で、途中奉天ホウチン（瀋陽）空港で給油のため三十分ほど休憩した。この航空機の座席は狭く、乗り心地は悪い。しかし高度は余り

高くないので、眼下の風景はよく見える。幾つかの山波と大草原を越えて哈爾濱上空に近づいた。

〔哈爾濱の地〕 上空から見た松花江は大河である。夕陽に映えて照り輝いて、大きくうねり、満々たる水量は広い湿地帯を潤している。この幅広い松花江が引揚げの際に大難洪をした所かと思うと涙が流れる。

哈爾濱空港から今夜の宿泊施設「民族飯店」に着いたのが午後八時三十分ごろ、疲労困憊^{こえはひ}、夕食もそこそこにベットに入る。

翌日、朝食前にスターリン公園と松花江の河畔を散策した。公園入口の二百メートルほどの路上が両側朝市で軒並み衣類・果物類・野菜類・川魚・雑貨と生活用品はすべてそろおうようだ。人波が続く松花江の堤防は昭和三十二年の大洪水を市民が労働奉仕で五十キロにわたって築き上げたという。防洪記念塔が誇らしく聳^{たか}える。公園内は老若男女が三々五々集まって軽運動を行っている。これが本場の大極拳だ。

朝食を済ませると旅行社の案内で、極楽寺・黒龍江省博物館・ロシア正教会・国際飯店・東北烈士記念館

と市内観光、五十年前の落ち着きのある美しい街の印象は今はない。二十一時三十分発、佳木斯行き特別寝台車に乗車するのが大苦勞、戦後の闇列車と同じだ。

人・人・人の鍋に巻き込まれ、その勢いに押し流されて姉が行方不明の騒動になる。発車間際に青息吐息でたどり着き、お互いに顔を見合わせて「母を連れて来れなくてよかったね」、まったく老人・子供には絶対にお勧めできない。中国東北地区の汽車の旅である。

特別寝台車は二段ベットの四人で、一部屋のドア付きなので安眠できると思っただが、横揺れが激しく、備え付けの毛布も汚れて使用するには気持ちが悪いのので、持参したタオルを首回りに使って見たが、深夜になると寒さが増して便所へ行く回数も多くなる。ただし車中の便所は汚れが凄まじい。床は小水の洪水状態でズボンの裾も濡れる有様だ。この便所は中国の東北地区ではどこへ行っても汚い。水洗便所が有っても水が出ない。便所紙はないので硬い紙を使用するため、詰まって流れないと悪循環でまた汚い。使用中でもドアは開けたまま、若い美しい女性でも平気で開けっぱなし

のご使用中であるから、目のやり場に困ってしまう。

この旅行の時期が中国では北京オリンピック誘致運動の最盛期であったが、このような生活環境では、外国人を多く迎えるのは無理なのではないかと危惧された。寒さと横揺れで寝不足のまま、列車は六時四十分佳木斯駅に滑り込んだ。

〔佳木斯の地〕 この地は渡満期間の中で、七年間と一番長く父の仕事上、中国人の友人が一番多い所であったから、終戦後の逃避行で佳木斯に来たのではなからうか、と一縷の望みを求めて計画した。父捜しの第一歩であるが、五十年も経ってしまうと街中が、すっかり様変わりしている。この中から短期間で探し出すことが、いかに難問であるか思い知らされる。

佳木斯駅は建て替え中で新駅はロケット弾頭を乗せたようなモダンビルになり周囲とは不似合いで、旧駅舎は取り壊し中で、残骸が最後の別れのために残っている程度になっていた。駅前広場も改修中で放射線に広い道路が未舗装の砂塵を上げている。佳木斯神社跡が西林公園になっている近くの佳木斯賓館が今夜の宿

になる。ルームキーを受け取り、部屋に入ってかびの匂いに驚いた。ベットの寝具が湿気を含んでいる。女服務員に部屋を換えてもらう。周囲の宿泊客は中国軍人が多かった。荷物を置いてから、佳木斯のガイドを含めて、旅行の目的を説明し訪問順を決めて街へ出た。協和大街の国際運輸跡地へ、現在の長安路から昇平路の付近で、戦前のことをお年寄りを主に尋ねて歩き、父の写真入りチラシを渡して反応を見るが分からない。ガイドの通訳で話をしていると、すぐに人が集まって来る。その好奇心が強い人たちから、いろいろな情報が入る。戦中戦後のことは彼の老人が一番良く知っていると案内されて右へ左へと振り回されるが、結局分からぬ。チラシを置いて「何か情報があれば連絡してください」とお願いをして歩く。

この紙面をお借りして、父親探しに使用した内容を記載して、読者の皆様の中で情報をお持ちの方がありませんでしたら、御連絡くだされば幸いです。

〔参考資料〕

尋ね人（写真） 佐藤 知儀 家族同伴で（旧満州

国) 三江省佳木斯に七年・興安北省海拉爾に一年、國際運輸(株)に勤務、中国語・ロシア語可、昭和二十年(一九四五年) 八月九日、ソ連侵攻で現地召集、陸軍三二九の九二六部隊特設備第二〇六大隊に入隊、八月十七日海拉爾鐵橋付近の戦闘に参加、停戦後戦死者収容の折、姿が無かったと証言あり。本人の消息を知る人がいましたら御一報ください。家族は齊々ハ爾に疎開後昭和二十一年(一九四六年) 帰国いたしました。

本籍地―長野県上水内郡信濃尻村大学古海三九六五番地、生年月日―明治四十年十一月十日生、特徴―身長一六〇ぐらい、肩幅広く少々ガニ股歩き気味、色白、ただし頬の周囲赤味あり、鼻高く獅子鼻、左頬に十円玉ぐらいの傷痕あり、性格温和。

連絡先 〒343 埼玉県越谷市七左町六ノ一一七

佐藤 タケ(妻) 佐藤 彰恭(長男)

電話〇四八九一八七一九五三五

以上が一部省略してありますが尋ね人のチラシ内容です。

父を尋ねて歩くのも限界と知り、七年間生活した懐

かしい場所を巡り歩くことにした。

朝日在滿国民学校・女学校・浜田病院・神社・東宮公園・忠霊塔・房産住宅・銀座・松花江・中之島と各跡地を貪るもたらように尋ね歩く中で昔の様子がしのばれたのか国民学校跡で、現在教育学園になっている講堂と校舎、校庭が昔のまま残っていた。校庭に立つとスケートリンク、運動会と走馬灯のように思い出があふれてくる。校舎内の教員室は現在も先生のたまり場所、講堂内は荒れてはいるが、正面講壇の右側に昔の校訓の額縁の跡、右側に大時計跡が薄白く残っている。校訓は当時東滿地区総司令官の山下奉文の墨跡鮮やかな太い字が目につかぶ。校内の樹木が大きく伸びて、時の流れを思わせる。初老の面長な中村校長や学友の顔が思い出された。

今回の旅行の中で、これほど施設が確かに残っていたのは、この学校だけであった。

女学校は一棟だけが現在の医学院の中に残っていた。浜田病院付近は道路拡張のため昔の面影はない。佳木神社、東宮公園跡は現在は西林公園と一部動物園に

なっていた。房産住宅や銀座通りはこれも昔の姿を思
い出すものは何一つ残っていない。松花江河畔は哈爾
濱と同じように堤防が連なり防洪記念塔が建っている。
渡し舟で中之島へ渡つて見ると、現在は柳樹島と呼ば
れて公園になっている。昔、この河畔で水泳に競じた。
水面を見ていると当時のころがよみがえる。

十年計画で渡満した一家が七年間を過ごした。この
佳木斯国際運輸(株)の協和大街代用社宅で妹が生まれ、
向陽街社宅で弟が生まれ、順風満帆の我が家の生活と
は別な所で次第に齒車が狂い始めていた。昭和十六年
に太平洋戦争が勃発、病院を開業していた叔母が、子
供二人を残して腸閉塞で急死し、病院を継続するの
には後妻が必要となり、母との縁が切れた時期に、父に
転勤の話がでた。大興安嶺山脈の西北部、北境の地、
海拉爾は好条件である。叔母のいない佳木斯には未練
はない。国境に近い所でも日ソ不可侵条約が締結され、
昭和二十一年四月までは、安全な場所であると判断し
て、昭和十九年七月に子供たちの夏休み中に移転に踏
み切った。

子供のころ、この松花江で泳いだ。水の感触を味わ
うように手を入れる。この冷水も佳木斯とも今夜でお
別れである。一泊二日の父探しもこの佳木斯では完全
に手応えがなかった。二十二時二十分発、齊々哈爾行
きの指定寝台車にも大騒ぎで乗り込んだが、長旅のた
め旅行カバンが大きいのと、重いので終戦当時の閤列
車に米を運び込むような状態だ。中国の列車は梯子式
階段を四・五段昇らなければならぬ。ブラットホー
ムを高くするような工夫はどここの駅でも考えていない。
不思議な鉄道である。これは乗客数が多過ぎて調整弁
の役割を果たしていると考えているとしたら、乗客不
在のお役所的発想である。もともとこの国は乗務員も
運転手もすべて公務員、ホテルマンも公務員の国であ
る。汽車に乗る度に私たちが苦情を言うので、全ルー
トガイドの劉紅さんが申し訳ないような困った顔をする。
うつらうつらしている客を乗せて夜汽車は一路、
哈爾濱經由で齊々哈爾へ。一眠りしたが、朝日の輝き
で目を覚ますと哈爾濱駅である。一時停車して発車す
ると十分ぐらいで松花江第二鉄橋に入る。この鉄橋を

四・五分かかって徐行通過した。この鉄橋と、この松花江を食い入るように見ている姉と私の気持ちを同行の人たちも知るはずもない五十年前の事柄が思い出される。

昭和二十一年八月末、中共八路軍より突然の引揚げ命令が出され、翌日、齊々哈爾駅前に集合した。引揚げ手続及び身体検査を済ませて順次、無蓋貨車に乗せられた。松花江の手前の駅で降ろされ、路線沿いに松花江へ向かって歩かされる。ゾロゾロと長い列、子供たちが手を引かれ、重い荷を背負い泣きながら歩く、中国の駅間は長い。兄弟が弟妹の手を引き体を引っ張って歩く。野宿で一夜を過ごし翌朝松花江の川岸まで行くと、爆破された鉄橋が無残な姿を見せる。これでは列車も人も渡れない。国府軍の操縦する上陸用舟艇が引揚者を対岸まで輸送している。私たちが乗船できたのは昼近くであった。この時期、国府軍と中共八路軍の防衛戦が松花江を挟んで対陣していたので、哈爾濱市街側の国府軍の軍人に誘導されて、引込線の有蓋貨物車に乗り込んだ私たち親子が涙を流して渡河した

松花江である。飲料水も食糧もない。引揚臨時列車が停車すると中国人が水や食物を売りに来る。高い値段で買った水で下痢を起こす。臨時停車することに鉄道沿いの野原は水状の野糞をする人が増えてくる。この貨車で何日か経ってコロ島に到着したが、今でも何日かかったのか思い出せないのが不思議だ。コロ島収容所で引揚船の乗船順番待ち、この待機日数も思い出せない。ただ米軍輸送船を見ながら、あの船に乗れば日本の国、故郷に帰れると毎日眺めていた。

DDTの散布で体全体が白くなる。物品検査も数度繰り返され、どうにか乗船して博多の土を踏んだが、ここでもDDT散布は続いた。二日ばかりで渡河した松花江を、四・五分で通過した車中で、引揚時のことを思い浮かべていると自然に口が重くなる。姉も車窓から外の景色を追い掛けている。同じ思いであろう。

〔齊々哈爾の地〕 列車は齊々哈爾駅に入った。終着駅のため降車は落ち着いて周囲を観察しながら改札口を出ることができた。出口は旧駅舎を利用しているが、右隣に新駅舎ができて、乗車口は新駅舎の使用で

ある。駅前ロータリー付近は改修も終わって整然として
いる。市内湖濱飯店に入る。小休止してまず齊々哈
爾中学校跡を訪れる。現在の新工地木材という工場の
一部に案内された。中学校正面の大理石階段と、その
一部分が学校を思わせる程度で、斉修塾跡も裏の丘陵
跡も昔の姿は見当たらない。中学校跡から国際運輸(株)
青年隊舎跡を探したが、当時、原野で中学校と隊舎の
間には一棟も家が建っていなかった場所が、約五百メ
ートルの間家並みで埋まり、見当がつかない。ソ連軍
の侵攻で海拉爾から避難してきた一家が、一年間生活
した場所がすっかり変貌して、雑然とした街になって
いる。大和ホテル跡は公園式の中心広場になり、左側
に建っていた満電跡が往時を思い出させる。飛行場跡
は工業団地を建設中で、昔の滑走路が一部残っていた。
国際運輸(株)の跡も分かる人はいない。父を探す手蔓(づル)が
まったく掴めない。荷馬車が多く止まっている場所で、
尋ね人のチラシを渡して情報提供の依頼をして歩いて
も反応がない。この齊々哈爾でも父親の情報は完全
にゼロであった。

父親探しと並行して当地で中国人の恩人を探して歩
く。「春田」と言う製菓店の店主、白さんである。製
菓店のあつた付近を尋ねて歩くと老婆が出てきて、昔
話を聞かせてくれた。「春田」の白さんは、国府軍の
戦が落ち着いたころ、遼寧省の方に帰郷された。四十
年も前のことでそれ以上のことは分からない。また分
かる人は今はいないだろう。なりふりかまわず探し歩
く人に巡り会えず意気消沈。しかし、この老婆と集ま
ってくれた人たちに訪中の理由を説明し、「白さんは
命の恩人であり、お礼をしたくて探し歩いていること、
また、白さんと連絡でも取れたら今日の訪問があつた
ことを伝えてください」とお願いをして現地を離れた。
齊々哈爾担当ガイドが日本人墓地があるので案内する
と言う。日本人が引き揚げた後、収容所や嫩河(のんが)に放置
された遺骨や遺体を埋葬した所だと説明を受けて、案
内された場所は小さな丘の上、一棟の住宅が建ってい
る。庭先に入ろうとして驚いた。人の骨が露出してい
る。叔父は肋骨が細いので女性の遺骨であろうと推定
した。姉が線香に火を付けようとしていると、家の中

から中国人が出て来て「帰れ、帰れ」と大声を出される。ガイドが二言、三言と話をしたが、顔色が変わった。「危険だから至急帰るように」、やむを得ず目礼のみで追われるように離れた。せめて遺骨を埋葬してやれたならばと心残りであった。遠方からこの丘を望みながら終戦当時のことを思い出していた。

昭和二十年四月、齊々哈爾爾中学に入學した私は七月の夏休みを終わらせて、斉修塾で寄宿生活に入っていた。八月九日、ソ連侵攻のニュースが入り海拉爾の家族のことが気になっていた十日の昼ごろ、姉と弟二人が面会にきた。「ソ連軍に追われ避難してきた。父は現地召集で海拉爾に残った」と言う。教師に報告すると、「至急家族のもとへ行くように」指示を受け、姉たちと三人で学校前の原野を約五百メートルほど歩いた所に、国際運輸(株)青年隊舎があり、避難家族が約三十世帯収容されている。六畳一部屋が八人家族の仮住居になった。私の寝具類を持ち込んだが不足なので恩師に相談し、教師と同級生から二・三組の寝具や衣服の寄付を受けた。この寝具類のお陰で越冬の厳寒期を

一人の故障者も出さずに過ごしてこれた。

この青年隊舎に約百五十人ほど収容されている二階建ての中に約一個小隊ほどの警備隊員が、各所の壁に穴を開け銃眼を作り防衛に当たっていたので、終戦の日、夜間の中国人の大暴動にも被害を受けずに済んだのも奇跡だった。当日正午に玉音放送を壟断の中で聞いたが、雑音が入り、内容不明で思案中に飛行場に敵機が爆弾を投下、機銃掃射を数回繰り返したので終戦を否定していたが、夜中に起こった暴動である、深夜の銃声は特に響く。その後四・五日の外出禁止の中でソ連兵の進駐を知った。酒で焼けた赤ら顔のソ連兵の「ダワイ」の声があいさつがわりで略奪が幾日か続いた。入れ墨の腕に幾つも腕時計をはめて、それでもなお腕時計を要求する囚人兵が二・三人のグループで波状的に横行する。婦女子に対する暴行・強姦の情報が流れる。女子は短髪にして男装、ソ連兵が徘徊しているとの情報が入ると天井裏に逃げ込むことを繰り返していた。このころ、中学校の教練用小銃、機関銃を大和ホテル前のソ連軍に引き渡し武装解除になる。重戦

車が二両警備に当たっていた。日本製タンクと比較にならない重量感があり、これが勝負の分かれ目かと横目で見ながら、山積みの武器の中へ担った小銃を投げ捨てる。武装解除の往復で道端の日本人住宅や店舗は中国人暴動で完全に破壊され、燃料になる物は屋根や柱はもとより木片の一つも残していない。残っている物は煉瓦のみ。その煉瓦も一枚、一枚と剥がして持ち去っている人たちの動きに啞然とした。治安も次第によくなくなったころ、姉と二人中国人の製菓店「春田」でアルバイトを始めた。姉は通勤だが、私は口減らしの住み込み、中国人の職人に混じっての共同生活にも慣れたころ、中国の国府軍は、中共八路军軍の急撃にも慣れぬうちに撤退し街の中が急変した。劣悪な人民裁判が始まったのだ。菓子店の中国人職人に混じってこの裁判を見たが、戦後の荒廃した人心を巧みに利用した誘導裁判で、被告は日本人の元憲兵隊長・警察署長・開拓団団長などの肩書きを持つ者、中国人はこれらの協力者で、中国民衆に対しての悪政・悪行を罪状として書き連ねた大きな板を前後に下げ、両手・両足を縛ら

れ、厚紙で作った三角帽子を頭に、まるでサンドイッチマンの姿で馬車に乗せられたり、引きずられて、交叉点・公園・駅前広場で行う裁判所である。罪状を大声で読み上げ、民衆を煽動する。「撲死」、「撲死」群衆が上げる声に合わせて煽動者が被告を馬車から引きずり降りし、馬車の車輪に縛り付ける。棍棒や素手で入れ代わり立ち代わり殴りつける。血飛沫で顔の形が変わる。土色の面相・死相それでも生きている。また打撲が続く。人間の生命力の強さに胸が震えた。人道上許することができない人民裁判を目撃し、また、竜沙公園内の銃殺刑を私は終生忘れることはないだろう。いつの時代も勝てば官軍、負ければ賊軍の仕打ちである。

製菓の仕事にも慣れ、厳寒の時期にも温床おんとくの生活で暖かく、食事も中国の人たちと同じく、差別のないおいしい物が口に入る恵まれた日を重ねていた。母たちも会社が手配してくれた食糧の配給で、節約すれば半年ぐらゐは生きていける見通しがついたが、収容的軟禁状態は解けない。食事めしも雑炊ぞうじや水団すいだんで食いつなが

心細い。弟妹たちも中学校に収容された。開拓団の方たちが作った塩餡大福餅を売り歩いたり、中国人から仕入れた煙草や闇の洋酒を売り生活の足しにしていた。

八月に入ったころ、帰国の話が流れだした。このころには仕事上では菓子職人の助手として迷惑を掛けることもなくなり、周囲の人たちから「日本の国は敗戦で家も焼けて住む場所もない。食べる物もない。死人が続出しているから帰るな」とか、店主の白さんから「私の養子になってここに残りなさい」と言う話まで出てきた。「死ぬのなら故郷で」と白さんに私たちの気持ち伝え「春田」を退職することになった。退職の日、白さんは小麦粉の袋二袋を前に並べて「今日までよく働いてくれた。日本は遠い。何日かかるかわからないが、大切な物は食糧だ。持ち運びのよい長持ちするものを考えて一袋は乾燥牛肉、一袋は乾パンにしたので、この食べ物で全員無事に帰国できることを祈っている」と。この食糧が引揚げの際の貴重な命の支えになったことは言うまでもない。まさに命の恩人であった。

父探し、恩人探しも望みを絶たれた齊々哈爾の一夜が明けて、夜行列車に乗り込む時間まで、ガイドに私たちの希望を話して案内されたのが龍沙公園、この公園は歴史を感じさせる落ち着きのある名園だが、見て歩くうちに中共八路軍が執行した銃殺刑場跡に出た。

花壇の広場になっていて往時を思い出すものは何もない。楽しそうに親子連れが遊ぶ姿が多い。黙祷する私たちの姿を周囲の人たちはどう見たか、齊々哈爾担当の若いガイドも何も知らなかった。次に嫩江ぬゑがわの遊泳場まで車を飛ばす。この地も死者を葬るのに凍土は固すぎて掘れず、火葬するにも木屑すらない遺体の処置に困った人たちが凍結した氷上に投棄して氷が溶けたときには、流れ流れて黒龍江から日本海へたどり着くだろうとその願いを込めて、数多くの死者が置かれた場所、今は悠々と流れる水面に過ぎ行く夏を惜しむかのように、若者たちが水泳に競っていた。まったく平和な風景であった。ここでも冥福を祈って合掌。

夜行寝台車海拉爾行に乗車直前になって、全ルートガイドの劉江さんが「皆様に申し訳ないが、特別寝台

予約が急遽、一等寝台車に変更になった。理由は中国の高官が急に乗車することになったため」と言う。この国は遠来の客より自国の高官が最優先のようだ。文句を言っても始まらない。我慢と何事も経験の好奇心も手伝って乗車したが、これが死に物狂いとは正にこのこと、恥も外聞もない闘いで、全員乗り込んでまた

驚き、三段ベットで仕切りがない。中国独自の臭気と騒音に輪を掛けて若者のマナーが悪い。共産国も若者に対する教育に変化があるようだ。この最悪の列車の中でも愚痴一つ言わず協力していただく、叔父や義兄に対して申し訳ないやら、悲しい気持ちでベットに横になる。明日は最終地海拉爾の街に入る。と思うと気持ちが高ぶり頭が冴えてきて眠れたものではない。車窓が夜露に濡れて寒気が増す。備え付けの毛布の中で小さく震える。大興安嶺山脈を越えているらしい。速度が落ちて列車が軋む。その軋み音を聞いていると昔のことが思い出される。その音を聞きながらちよつとの間、うつら、うつらと遠い所に引き込まれていった。すっかり明るくなって外を見ると、線路に沿って湿地

帯を濁流が渦を巻いて流れている。この湿地帯を二時間くらいも走ると、伊敏河の鉄橋に差し掛かった。下流二百メートルほどの所に旧鉄橋の橋桁が点点と芦草と川の流れの中に姿が見え隠れしている。私たち一行は身を乗り出して見入っていた。

〔海拉爾の地〕 海拉爾駅十時四十分着。駅舎は新

・旧二棟並んで建っている。駅前の元満鉄住宅の付近は広いロータリーになり、市内に向かう踏切は昔のまま使用されている。この踏切は人と自転車専用で自動車・馬車などは東海拉爾駅方面に有料立体旋回型の陸橋ができています。この立体橋を渡り東頭道街に入った。

昔の露人家屋の木造建築物が点点と残っている。中央大街の貝爾大酒店に旅装を解き休む間も惜しい。すぐ街へ出た。父の情報を入手するのが先決。並行して命の恩人「張馬車頭」も探さなければならぬ。父の勤務先国際運輸(株)海拉爾営業所跡へ、昔と同じ運輸業が行われているらしい。構内にトラックが数台駐車している。中国内蒙古海拉爾地区運輸公司の中で紹介された所長の、裴庆森氏は訪問の理由を十分理解され、「戦

中・戦後の国際運輸のことを知っている老人と、張馬車頭を知っている人に明日会えると思う」と話してくれた。翌日の再訪を約して運輸会社を出た私たちは、海拉爾駅前倉庫跡地へ行つて見ると、倉庫棟とヤマトホテルの付近まで整地されて何も無い。駅構内の操作用場沿いに三棟倉庫が残っている。その奥に土煉瓦造りの家屋が群がって、一集落を作っていた。近くの踏切は往来が混雑しているが、特に蒙古系、露人系の人たちは数も増している。やはり国境の街だと思つと緊張する。この街のどこかに父がいる。早く探し出さなければならぬ。東二道街の露人住宅街の跡地をチラシを持つて尋ね歩いた。この一面は一年余り我が家が生活を含んだ所。ソ連軍の不法侵攻で父と別れ、十年計画を九割方達成させ、達成間際で破壊された恨みの土地である。近所の住人に尋ねても反応がない。この付近は昔と変わらない露人住宅が多く残っていた。東頭道街を直進し、寺田公園跡を右手に見ながら海拉爾在万国民学校跡へ。学校に入ると玄関先に昭和六十一年海拉爾小学校同窓会の諸氏が訪問した記念写真と、多

額の寄付金の写真と、使途明細が大きく掲示されていた。八年前の事柄を今もなお、日中友好と宣伝される、この女性校長の人柄が偲ばれる。校長に校内を案内していただいた北側の一角に、昔の校舎が一部残されていた。その校舎の廊下からガラス越しに教室内を見た。窓下にスチームがある。海拉爾の嚴寒時期にこのスチームの湯気は体と弁当を温めてくれた。その温もりを思い出した。女学校跡を見た。現在、蒙古人幼児学校のように分かる人がいなかった。歩き回る足元は無舗装の凸凹道路で車が通過する度に大砂塵が舞い上がり視界をさえぎる、目が痛い。二度と再び尋ねることができない所で悔いを残さぬように中国人民政府外事課公室にも赴き局長の趙華氏にもお願いをした。協力的で私的夕食会に招待すると、ご多忙の所を出席していただいた。

翌日、運輸会社の裴庆森氏は仕事の時間を削いで町中を案内してくれたが、最終的には命の恩人の張さんは二年前に病死され、その奥さんは数年前に死亡、娘さんは昨年転居して行き先を知る人はいなかった。尋

ねた日が遅過ぎたのである。ただし、張さんの親友で国際運輸の昔を知っている老人のお宅に案内された。伊敏河を渡った、新都市計画地の高層住宅が十数棟建ち並んだ中の、五階建て四階に老人は子供夫婦と孫たちに囲まれて生活していた。突然の訪問に警戒して通訳してくれるガイドに「張馬車頭は親友でよく知っているが、日本人とは接触したことがないから全く分からない」中国語で答えていた。昭和二十年八月まで国際運輸で仕事をしてきたとのこと、八月十五日ソ連侵攻により現地召集から知る限りのことを老人に話していく。張馬車頭は命の恩人なので、お礼がしたくて探していた旨、来訪の目的を話していると、徐々に警戒心を解いてきた。突然驚くほど流暢な日本語を使いはじめた。五十年も使わなかった日本語を、抵抗もなく自然に話す八十歳を超えたこの老人は何者なのか不思議なほどだ。終戦後の日本人弾圧の下で、日本語に対する警戒心がなかなか日本の言葉を話さなかったのか。日本人の残留者なのか。しかし、話の中で、国際運輸の日本人の名前は一人も出てこなかった。張馬車頭の

死亡は決定的であった。老人にも父探しのチラシを渡して、何か情報でも入ったら連絡が欲しい旨伝えて、手土産を渡し、集団住宅を後にした。伊敏河に架かる興安橋を渡り河畔に自動車を止め、水嵩を増した流れを見つめていると、四十八年前に母が子供六人を連れ、中国人の張馬車頭に助けられながら渡った橋を思い出していた。

昭和二十年八月九日、午前五時ごろ遠雷のような音響で目を覚ました。「演習でも始まったか」とラジオのスイッチを入れ、臨時ニュースでソ連軍の侵攻を知った。父は急いで勤務先へ出社、姉は女学校の試験日で登校、小学生たちは臨時休校になった。午前八時ごろ海拉爾上空に飛来した数機のソ連軍機が、無差別に爆弾を投下した。玄関先の防空壕に避難すると、待っていたように隣家と庭内、そして路上に続けて三発爆弾が落下した。突き上げる振動が防空壕で身を縮めている全員の上に、土崩れを降りかける。敵機が去って姉が帰宅した。向陽街や東二道街の帰路で、負傷者に応急手当をしながら帰って来たと話していた。昼ごろ

父が一時帰宅し、「ソ連軍の侵入が急で男子は現地召集になった。一般人は至急避難列車で哈爾濱・齊々哈爾方面に行け。社員の家族は農林屯に集合するように。行き先は齊々哈爾にして、現地で彰恭と合流して時機を待て」と言い残して奉公袋を母に預けて我が家を後にした。その父の後姿が見納めになろうとはだれも無我夢中で分からなかった（今でも思い出話の中で母は言う）。

非常食と若干の着替えをリュックに背負い、子供たちの手を引いて、我が家を出たのが午後三時ごろ、生後二カ月の乳呑み子を背に十五歳の姉が、三歳と五歳の妹、弟の手を引き、十一歳の弟が七歳の弟の手を引き、追われるように歩いて、河潤街付近まで来て動けなくなった。休憩していると「先に行くよ」「頑張れよ」声を掛けて顔見知りの会社の奥様方が子供たちと追い越して行く。その人たちを見て母はどんなにか心細かったことか。子供たちに声を掛け、歩き始めたとき、荷馬車で避難中の馬車頭の張さんが馬車を止めた。「佐藤さんの奥さん、皆さん馬車に乗りなさい」馬車

には張さんの妻女と五歳の娘さんが乗っていた。「地獄で仏」とはこのことである。全員乗車して馬車が走り出した。興安橋を渡り海拉爾街道へ「佐藤さんの奥さんたちも乗せて」と声が掛かると馬車頭の顔がゆがんだ。「あの奥さんは絶対に乗せない。あいつの旦那には随分いじめられた。なぜ佐藤さんを乗せたか分かるか。恩返しをしたかったからだ。あの人を乗せろと言うなら降りてもらう」、その言葉を聞いて、それ以上頼むことができなかつた。姉が降りてその奥さんの子供の手を引いて後から歩いて来た。農林屯の集合場所まで送ってくれた張馬車頭が「佐藤の旦那には随分助けられた。良い人だから必ず再会できるよう祈っているよ」としみじみと話してくれた。「助け合うことはお互い様だからね」感謝と再会を約束して別れた。齊々哈爾行きの避難列車に乗車したころは、暗く海拉爾市街の空は紅に染まり時折り爆発音が空気を震わせていた。

確かに馬車に乗れず、親子が歩いて避難したら齊々哈爾行きの列車にも乗車できず、全員無事に現在が迎

えられなかったことだろう。父の人徳に感謝する深い
思いで興安橋を離れた。

車を伊敏河と海拉爾河の合流点に走らせると、左側
の丘陵地で一目で陣地跡と分かる。父たちが入った唯
河南台陣地と呼ばれたところだろう。姉が準備した海
拉爾地区の戦闘地図を参考に現地と照合して見た。

八月十日にはソ連軍は満州里方面を突破して、海拉
爾要塞を包囲したらしい。約四百台の戦車部隊と砲兵
部隊の兵力だが、日本軍の防衛軍と一進一退の激戦に
なり、防衛線が停滞していた。八月十七日夜、大興安
嶺の要塞陣地へ伝令のため七人の兵が、この唯河南台
陣地を出た。伊敏河の岸辺を鉄橋に向かう。鉄橋上に
横倒しになった機関車は、ソ連軍の進路を妨害するた
めに防衛軍が脱線させたもので、先行の兵が妨害車を
越えたとき、対岸のソ連兵から一斉射撃を浴びた。

終戦後、遺体収容作業を行ったが、父の姿は見当た
らなかった。昭和三十二年七月に、ソ連の抑留生活を
終わらせて帰国された中村さんから連絡を受けた。

(戸籍上の記載事項を参考に記載する。昭和貳拾年八

月拾七日時刻不明。満州国興安北省海拉爾鉄橋付近で
戦死。長野県社会部長報告。昭和参拾貳年七月貳拾九
日(受附除籍)となっている。父探しの旅も努力の甲斐
もなく時間切れだ。明日の昼ごろには海拉爾空港へ行
かなければならない。叔父たちと協議した結果、残念
ながら父の探索はここで中止して、旧鉄橋の第一橋桁
側で慰霊祭を行うことに決定した。

橋桁の上部が大小数箇所破損して、コンクリートの
空洞内部が口を開けている。その暗い内部をのぞいた。
五十年の時の流れを忘れたわけではないが、何か父が
この内部に寝ているような錯覚である。この錯覚は
齊々哈爾で露出した人骨を見てきた感情が、周囲に注
意を払わせたのかもしれない。橋桁の下の水際の洞に
突き出た場所に祭壇を設けた。祭壇といっても風呂敷
を広げ、中央に父の戒名を置き、嗜好品の日本酒・煙
草・お赤飯・日本茶・果物・菓子などを供えて燻燭たきごけに
点火、各人で線香を焚き父の冥福を祈った。携帯用の
鈴の音で来訪を告げる。叔父が代表で追悼文を捧げて
くれた。

辛苦辛苦の十三日間ではあったが、北京經由でこの旅は終わり。

現在遺骨代わりに持ち帰った小石は、東京都府中市の聖将山東郷寺に手厚く葬られ、今年五十回忌法要を営み、兄弟全員に分骨され、それぞれの家庭の仏壇で安らかに眠っている。

【執筆者の横顔】

佐藤彰恭氏の父は明治四十年、長野県上水郡信濃尻村に生まれ、大陸志向型であったので、昭和十三年に姉七歳を頭に彰恭氏、弟、妹の四人を連れて渡満し、国際運輸(株)に採用になって佳木斯に七年、ハイラルに一年勤務して平和な生活に浴しておられた。

父は昭和二十年八月九日現地召集をうけ、陸軍三二九九二六部隊の特攻隊第二百六大隊に所属し、八月十七日ハイラルでソ連軍と戦争に没入し惨憺たる戦場のさ中、生死不明。その結末が不詳のままである。とにかく父はハイラルの自宅にはもどらなかつた。

その後、母は姉十五歳、長男彰恭氏十一歳、弟七歳、

妹五歳、妹二歳の五人を引き連れてチチハルに向けて逃避行となった。しかし列車は既に動かない。止むなく往歩となればチチハルに着くことなど夢のごとくである。途方にくれて泣いている母のもとに、父の職場で働いていた満州人の馬車頭の張さんが、馬車を止めて、これに乗ってくださいとのこと、母は地獄に仏と言つて張さんに感謝した。正に戦場での恩人である。この張さんのお陰で佐藤一家は興安嶺の彼方から千苦万難を克服して、ようやく日本へ引き揚げて来られたのである。

満州人張さんの恩愛無窮を忘れられない。

彰恭氏は、父が昭和二十年八月十七日ハイラルで戦死した事になつてゐる。その戦死した場所を探し求めて供養しなかつたら父の靈魂は冥福できないとの執念で、母の弟(叔父)と共に、平成六年父を弔う訪中を企画して出発、雲山万里の異国のハイラル旧鉄橋の桁側で父の慰霊祭を行った。祭壇と言つても風呂敷を広げ、中央に父の戒名、ローソク、線香をたき、米、酒、タバコ、赤飯、日本茶、果物、菓子を供え、鈴の

音で来訪を告げ、叔父は、親愛する兄にささげるの追悼文を読んでもくれた。「義兄の会いたいのは姉でしょう。姉は八十三歳なので来られなかった。姉は六人の子供をみな育てました。いつの日にか姉も義兄のところに逝きます。そのときはかわいがってあげてください。これから義兄のあなたをお連れして一緒に故郷に帰りましょう」と言って号泣したそうである。

高野山に少年石童丸が仏門に入ったその父を刈萱に道探し求めた心情に似て北満横断しての親に孝の佐藤彰恭氏の姿は煌煌しくみえた。

(社引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

北朝鮮鎮南浦疎開者三十人救出

東京都 神代 忠正

私の生まれは佐賀県で、平成時代に取り残された県のような気がしてなりません。こんなとき、青天の霹

靨とても思われる平成六年八月二十一日、夏の高校野球決勝戦で数百万人の野球ファンをテレビに釘付けにした。佐賀代表佐賀商業高校対鹿児島代表樟南高校との試合に、八回まで四対四の同点で九回表を迎えて、あの劇的な満塁ホームランを放った主将の西原君が、深紅の優勝旗を故郷佐賀に持ち帰ったのがなよりの県の表徴になりました。

その学校の北約四キロの田園の里の武士の家の四男坊として、亡父のスパルタ教育を受けながら育ったのであります。私の幼少のころ、佐賀は軍人王国で海軍では古賀元師、陸軍では真崎大将などきら星のごとく実在し、叔父も海軍少将という地位におり、一にも二にも軍人とはめはやされたものですから、自然と軍人になる希望を持つようになり、中学在学中、海軍兵学校及び陸軍士官学校をそれぞれ受験したが、幼少のころの中耳炎で体格検査で両校ともはねられ、やむなく一年間浪人生活を送る運命になった。何かと父と口争いを繰り返すことが多くなり、仕方なく大牟田市に叔母がいたのでそこで半年ほど暮らし、叔母の友達の貨